

『33年後のなんとなく、クリスタル』

田中康夫 著



河出書房新社

フロアーベールの「紋切型辞典」を連想させるようなウィットの利いた語彙の解説になっていた。「もとクリ」では、注こそがむしろ本文だったのである。「いまクリ」は違う。注は、まさに注である。それは、本文の物語に現実としての厚みを付与するための装置だ。注では、例えば本文で言及されていることの政治的背景の解説や、データが提供される。

【書評】 大澤真幸

TEXT Osamu Masahiro

一九八〇年、『なんとなく、クリスタル』（「もとクリ」）は、発表されるや、それこそ一大センセーションを引き起こした。この小説は、時代の最も敏感な部分に触れたのだ。『33年後のなんとなく、クリスタル』（「いまクリ」）は、著者ヤスオが、あれからおおよそ三分の一世紀後に、

「もとクリ」の登場人物たち——主人公の由利を含む女性たち——と再会する話である。彼女たちは、「もとクリ」では大学生だったが、今や、全員が五〇代だ。

読者は、33年間に何が起きたかを知るだけではない。メビウスの帯を辿ってきたかのようなふしぎな感覚を得るはずだ。同じ地点に回帰してはいるはずなのに、ポジとネガ、図と地が反転している裏側の世界に來てしまった印象を、である。この印象はまずは直接に、本文と注の関係からくる。「もとクリ」は、膨大な数の注で、人々を驚かせた。多数の注を付すというスタイルは、「いまクリ」にも踏襲されている。しかし、本文と注の関係は逆転している。「もとクリ」の本文には劇的な物語があるわけではない。それは、まさに「なんとなく」の話で、どこか現実感が乏しい。読者はやがて、本文は、注を招き寄せるためにこそあつたと気づくことになる。注は、ブランドや音楽や地名やらの紹介、しかも

現実の社会に影響を与える大それた理念へとつながりようとはしない。このことが、当時、とてつもなく大きな解放感を与えてくれた。

しかし、「いまクリ」では違う。ヤスオも、由利も、現実の社会にコミットし、それに何らかの変化を与えようとしていることがわかる。どのようにして？ 何らかの理念を取り戻すことができたのか？ 理念は、「もとクリ」の時点ですでに死んでおり、それを墓場から連れ戻すことはない。現実へのコミットメントの通路となつているのは、いくつもの「小さな善」への意志である。大きな理念を放棄して、美的・感性的な快樂への自由に逃走していた者たちが、理念が去つたあとに残っていた大きな空所に、いくつもの小さな善を見出し、現実へと回帰してきている。この33年の軌跡は、登場人物たちが真摯に時代と関わり、時代と共振していたことを証明しており、読後、静かな感動を覚えずにはいられなかった。